

#### 4 東泉寺と相模八十八札所とうせんじ ふだしよ

下飯田バス停付近に曹洞宗東泉寺がある。本尊は釈迦牟尼仏で、鎌倉市植木の龍宝寺の末寺である。巨木山こぼくさんという山号にふさわしく、山門前に樹齢四〇〇年ともいわれる一對の大銀杏いちごぎょうがそびえ立っている。

開創は不明であるが、当地の言い伝えによれば、以前は境川べりにあり、川の氾濫により再三流されたため現在の地に移されたといわれている。もとの土地は、「寺分てらぶん」と



東泉寺山門と札所石標

いう呼称で下飯田町四九〇番地付近に今なお一部が残っている。

中興開基（復興の祖）と呼ばれる人は旗本の寛助兵衛為春であり、天正十八年（一五九〇）より知行地として当地を治め、間もなくこの寺を再興したと思われる。なお、同時期に薬師堂も境内に移転している。

この薬師堂内には、弘法大師石像（お大師様）が祀られ、「相模国準四国八十八ヶ所」の一つとなっている。江戸時代には四国遍路が困難な人々のため、四国の各札所の霊砂を持ち帰り、新四国または準四国として各地ごとに札所ができていた。相模の地では、文政四年（一七二二）に鶴沼普門寺の僧の発願により、相模川以东の湘南・藤沢地区の寺院が割り当てられ、八十八ヶ所が定められた（P 216参照）。東泉寺はその五十九番札所となっている。山門下の参道の中ほどに札所石標があり、  
打ちなびく稲の穂なみのよる人も

みなゆたけしと飯田むらかな

と、当時の御詠歌が刻まれており、往時をしのばせてくれる。

山門は、十一世住職の春長義天和尚しゅんちやうぎてんにより天明三年（一七八三）に再興されている。平成五年、この山門を修復したときに、天明の飢饉の様子、浅間山の噴火、風水害の様

子などが、書き付けられている梁や肘木が多数発見された。例えば、

「此年七月上州浅間山焼、当村昼夜地震凡八日程…」

「白米百文二付六合民皆死…、粟稗皆クサル…」

などとあり、自然災害とともに米価が二倍にもなり、食料に窮したことが記されている。そのほか、当時の俳人美濃口春鴻（P 188参照）の句、「人も斯老いて秋立つ眉毛かな」など数句が書かれていた。

また、寺には、二十四世玉峰海州和尚が九州からこの地



海州和尚の往来手形

に入るための「往来手形」（江戸末期の文書）が残されている。

現代の本堂は、関東大震災での倒壊後、再建されたものだが、正面に掲げられている『東泉禅寺』の額は、明治三十一年に、当時の名僧として誉れ高かった、鎌倉円覚寺管長、釈宗演禅師によって書かれたものである。

## 5 琴平神社と金比羅権現信仰



琴平神社

東泉寺の左奥上に琴平神社（金比羅神社）がある。この神社は、この地に東泉寺が移転建立された天正十八年（一五九〇）ごろに、寺の鎮守として水難守護治水の神である金比羅神を祀って建立されたと伝えられている。金比羅の語源はサンスクリット語のクンビーラに由来し、仏教では、ワニを神格化した霊魚とされ、薬師如来の分身である十二神将の第一や般若十六善神の一つ（キンピロ神王）に数えられている。

この神社を建立した理由は、寺や村の人々を境川の水難から守ること、同時期に移転された薬師如来の守護神

とすること、などが考えられる。

創建当初から江戸期末までは、一般的に、神と仏は同一で、仏（本地）は、衆生を救うために、神の姿で権に現れた（垂迹）と考えられ、当神社も「権現」と呼ばれ、管理は寺の住職が「別当」として当たっていた。

金比羅権現信仰は、江戸時代初期から庶民の間で盛んになった。その理由の一つは、讃岐出身の大名や旗本が、江戸屋敷内に祀ってある金比羅様を毎月十日に開放し、裏門からの参詣を許可したことによる。特に、虎の門付近にあった京極家の金比羅様は人気を集め、その信仰は関東一円に広まったとされている。当神社でも、寛政年間（一七八九〜一八〇〇）前後に各所の造営、修復が行われており、近隣の地区からも広く寄進を受けている。文化二年（一八〇五）に、東泉寺十三世放牛東燐和尚が江戸の金比羅大権現を再勧請したことが、棟札にも記されており、当神社も権現信仰の輪の中にあつて、隆盛を極めていたことがうかがえる。

明治二年（一八六九）に、神仏分離令によって仏教と切り離され、名称が「琴平神社」となり、祭神も大物主神と崇徳天皇の合祀となったが、相変わらず「飯田のこんぴら様」として近郷近在から親しまれ、特に湘南方面の漁師の信仰を集めた。お宮の境内には、東泉寺の本山永平寺の守

護神白山妙理大権現や伏見の稲荷社、寄宮として八坂神社、天満宮などが祀られている。

毎月十日の縁日の夕刻には、今でも「お堂番」といわれる当番の人が参詣の人を待ち、「おごつく」と呼ばれる供



10月10日の大祭

物を配っている。また、十月十日には大祭が盛大に行われる。昔は下飯田全域を御輿や屋台が練り歩いたが、現在では元木地区のお祭りとなり、現代と調和しながらも伝統を今に伝えている。